

バーンズ小論 (その一)

宇佐美道雄

A SHORT PAPER ON BURNS (Part 1)

MICHIO USAMI

There are five chapters in this paper and only two of them are printed here ; the rest will be left to the next occasion.

What I intended to do here was to discuss Burns' works in relation to the social condition and the historical circumstances which the poet himself lived through.

The opening chapter 'Introduction' indicates the course I took in carrying out the analysis, and the second refers to the character of Burns' 'Poetic Diction' that was the title of the chapter.

That the peculiarity of Burns' poetic medium of joining Scots to English owed its artistic maturity to the Scottish Revival poets, that the Scottish Revival obtained its originality and potentiality from the quality and quantity of social development of Scotland in 18th century, and that Burns acquired his highest position among the glories of English or European poets when the Scottish Revival participated in the Romantic Movement as well as Scottish social development took its share in the English Industrial Revolution in the latter half of 18th century, - these are the facts that were pointed out in the second chapter.

In the next issue, the relation between Burns and the Romantic Movement will be considered from the view of 'Prosody' and 'Subject Matter' which are the titles of the following chapters.

§ 1 序 論

バーンズの詩の魅力に関しては、ほとんど言い尽くされてしまった観がある。バーンズの詩が、あの独特の力強さでもって、人の心を揺り動かすのは、たぶん、それが「大膽な生の喜びと、溢れるばかりのユーモアの精神で書かれている」⁽¹⁾からであり、そこに歌われている「思想と感情が、人間である限り、逃れることのできない万人共有のものである」⁽²⁾からであり、そしてたぶん、「狭い世界の、素朴な瑣事を題材にしながらも、優れた洞察力と詩的技巧をもって、普遍の世界にまで連なっている」⁽³⁾からであるだろう。しかしながら、バーンズの詩の持っている魅力について、この上さらに何かを付け加えることは、本論の意図するところではない。本論は、このような「誰も凌駕し得ない魅力、ないしは魔力」⁽⁴⁾を持っている詩歌が、何によって生み出されたか、それが成り立つためには、どのような条件が必要であったか、つまりは、バーンズの諸作品を生み出すに与って力のあった、ある根源的な基因、しかもその基因の、ごく限られた一面を考察することを目的としている。

だいたい、文学作品を成り立たせている根源的な基因、ないし根底的契機というものは、大まかに云って、二種類の異質のものの中に求められるようである。— 作

家個人の内部と、作家を取り巻いている外部とである。バーンズの場合、「彼の作品が、強く人の心に訴える原因は、彼の個性が持つ、諸々の潜在力の中にある」⁽⁵⁾と考えたり、「スコットランド歌謡のあらゆる美質が、彼の天賦の才能の中に集約されている」⁽⁶⁾と感じたり、「バイブルの教えによって訓育されていることが、彼の詩を不朽のものにしている」⁽⁷⁾と説明したり、「彼の詩は、本質的にはおしゃべりの文学で、この特質は、孤独を恐れさせる、生れつきの憂うつ症から来ている」⁽⁸⁾と判断したり、さらには、「バーンズは sincerity そのものである。従って彼の詩や歌の基調も、実にこの飾らざる sincerity なのである。それはバーンズの作り出したものではなくて、自然とバーンズの中から溢れ出たものである。バーンズの詩の善きはこのためである。バーンズの歌の心に訴えるのもこのためである」⁽⁹⁾と主張したりするのは、すべて、作品世界成立の基因を、究極的には、詩人内部に帰せらるべき属性 — その人の個性、生れつきの才能、授けられた教育、個有の体質、アプリアリに存在する性格等々 — に求めるということになるだろう。そして、こういう面にたいする考察も、再び本論の意図するところではない。ここで考察の対象とされているものは、詩人を取り巻いている外部的諸条件 — 十

八世紀後半という時代に、スコットランドの一寒村で、貧農の息子として生れて、37年間を生き た という事実 — が、バーンズの作品の諸特質を形成するに当って、どのように、また、どれほどまで与って力があつたかという問題である。それは、バーンズの作品世界にたいする、社会史的基因、ないし歴史的契機からの考察ということにもなるだろう。

この意味において、本論は、Sir Leslie Stephen が “English Literature and Society in the 18th Century” の中で為した試みと、概ね共通の地盤に立っている。彼の云うごとく、「偉大な作家は、種々の方面から考えることができる。彼はもちろん一個人である。そこで批評家は、彼を心理的に解剖しようと努力することができよう。そして彼が出現したその特定の時代や場所に関係なく、彼の知的精神の本質を述べて、彼の永久的な力の秘密を見出すこともできよう。その材料さえ手に入れば、これは興味ある問題である。しかしながらすべての人間は、彼が育て上げられた社会の一つの有機体でもある。彼の用いる材料は、宗教的、想像的、倫理的な理念の総合であり、それが又彼の精神的雰囲気を形成する。彼は又今日我々のいう『環境』すなわち、彼がその一部であり、彼の感情や欲望に特殊な方向を与える社会機構にも依存している。それゆえどのような作家でも、彼を十分評価するためには、ある個人的な特異性をもっている個人から生れた特徴と、社会的及び知的発展の現存段階によってうけた特殊な変質修正から生れた特徴とを区別することが必要である。」⁽¹⁰⁾そしてここでは、十八世紀後半のイギリス社会が、バーンズの諸作品の上に、必然的に投げかけた諸特徴を識別し、もって彼の詩歌が、いかに「その時代の一般人の心的態度を、完全に表現し、あらゆる時代の人々に共通の思想を具現した」⁽¹¹⁾か、それを考えてみたいと思う。

§ 2 用 語

バーンズの作品の、用語の上に見られる著しい特色の一つが、方言の多用、ないしは、Scots と English の巧みな混用ということであり、しかもそれが、作品世界を構成している素材やテーマの特異性と、うまく噛み合つて、独自の詩的効果を発揮しているという事実に関しては、誰も異論の余地があるまいと思われる。しかしながら、バーンズに関する限り、この種の用語上の特色を考察の対象とするに当って、「不朽の価値を持つ作品は、バーンズが拠むことなく習得した English によって書かれたのではなくて、家族や友人たちの間で、日常使い覚えた郷土語によって書かれたのである」⁽¹²⁾とか、「バーンズが自分の階級から逸脱しはじめるとき、人は彼の中に、不自然なポーズを装った、粗野で無教養な人間を見出す。彼は、文化と教養には無縁な詩人であったからである」⁽¹³⁾とか、あるいは、「バーンズは常に家

庭を中心とした、郷土の Scots を使った。想うに彼をして、世界的詩人としての地位を獲得させたのは、彼が庶民の間に行われる力強い口語を使った点に起因するところが、多分にあるのではないだろうか」⁽¹⁴⁾とかいうような発言 — これらの言葉が暗示する、ある種の先入観ないし偏見の類いを、先ずもって取り除いておく必要がある。すでにして F. B. Snyder は、「言語学者ならば、バーンズの文学作品に用いた言葉が、決して口で話したりする言葉などではなくて、特別の目的のために、でっち上げられたものに過ぎないことを、たちどころに指摘するであろう。バーンズは、彼の詩的用語の中の Scottish element に、いろいろな試みを加え、彼の詩集の第二版を出すに際しては、ある時には地方語を加え、ある時にはそれを減じたりして、もって自分の作品を改良したのである」⁽¹⁵⁾というがごとき主張を展開し、W. P. Ker は、「バーンズは、郷土語を使うときにのみ、興味ある詩を書くことができたが、English を使うときには失敗したというようなことを云う人がいる。しかし、いったいバーンズが、いつ郷土語を使い、いつ English を使ったというのか」⁽¹⁶⁾のごとき反論を提起している。近年の研究は、バーンズの詩歌に現われる Scots が、「生れ故郷のエア州方言と、父から受け継いだマールズ方言とを、少しばかり含んではいるものの、だいたいにおいて、English 風の詩語が複雑に結び付いた Edinburgh 詩壇の Scots であった」⁽¹⁷⁾ということをもはや争い得ない事実と化しており、この点に関する限り、彼の用いた English が、懸命に習得した十八世紀英詩壇の常套的詩語から成っていたという事情と、まったく軌を一にしていたことになるのである。つまるところ、極めて当然のことながら、バーンズの詩歌を構成している用語は、Scots も English も共に含めて、すべて周到に練り上げられた poetic diction であつて、決して日常の使用に供される Spoken language などではなかつたということになるわけである。“Tam O' Shanter” の59行に始まる、Scots から English への突然の転換は、そのあとに続く pure English による常套的明喩と結び付いて、しばしば読む者の目を奪う。この部分は、Scots と English の併用という詩的用語上の観点からすれば、いさか不器用な技巧のうちに数えられるべきものと思われるけれども、だからといって、52行に始まった、詩人の内部にある ironical なものの表明が、59～66行に至って頂点に達し、それが、完全に Scots を排除した literary English に託されたという事情を、そこに感じ取らない人は先ずあるまい。この部分は、バーンズの用語の上の細工を、最も露骨に示した部分と見なして差し支えなからうが、同じ詩の中でも、同様の性格を持つ、193～198行の一節の方は、もう少し微妙な味わいを持っているように見える。この部分も、十八世紀文学概念の上からは、確かに literary simile と見なされるであろう三つ

の明喩から成っており、その大部分は、English を用いられている。

As bees bizz out wi' angry fyke
When plundering herds assail their byke,
As open pussie's mortal foes
When pop: she starts before their nose,
As eager runs the market-crowd,
When 'Catch the thief' resounds aloud.

という三箇の simile が六行にわたって置かれた後で、

So Maggie runs; the witches follow,
Wi' mony an eldritch skriech and hollow.

という叙述部に続くのであるが、ここでバーンズは、魔物たちが一せいに襲いかかって来て、タムがあわてて逃げ出すそのすさまじい様子を、pure English による人工的な明喩に託して表現しようと試みているらしく見える。第一の明喩を形作っている最初の couplet の中では、脚韻を踏む 'fyke' と 'byke' の二語が Scots を用いられ、第二の明喩を形作るつぎの couplet の中では 'pussie' という行間の一語だけが Scots にされ、そして最後の明喩の中では、一語も Scots が出て来ない。つまり三つの人工的な明喩を提示するに当って、詩人の内面にある造型的意欲が、除々に熱度を増し、比喩がどぎつくなってくるにつれて、その度合いが English 使用の純度の高まりによっても、呼応されていると考えられるのである。

“Tam o' Shanter” の中に現われる前述の二箇所は、English language による十八世紀英詩壇風の語法への突然の転換の故に、バーンズの用語に見られる強い作意の跡を、すべての読者に印象づけるのであるが、バーンズが見せる Scots と English の使い分けの絶妙さは、これらの例よりは、はるかに複雑な様相を呈する。T. Crawford はその著 “Burns: A Study of the Poems and Songs” の中で、バーンズが示す Scots と English の混用の微妙さを、おびただしい数の例と共に説明しているが、“The Jolly Beggars” から拾ってあるつぎの stanza などは、その最も説得力の強い一例ではなからうか。

The caird prevail'd - th' unblushing fair
In his embraces sunk,
Partly wi' love o'ercome sai sair,
And partly she was drunk.

Crawford の分析によれば、「最初の二行は、ほとんど完全に十八世紀英詩壇風の英語であるが、このすぐ前の部分 (Scots language によるいかげ屋の歌) との対比のために、この差し込まれた英国風の詩語 (prevail'd と fair) の使用を ironical なものと化している」⁽¹⁸⁾ のであり、さらに、同じ二行の中でも、方言を全然含んでいない後の部分の方が、'caird' というゲール語系の方言を含んでいる前の部分よりも、一層 ironical な味が強い

である。「三行目に入ると、確かに調子が変わる。語句が Scots language へ戻るために、前の irony から離れて、状況をありのままに認識し、まじり気のない感情で扱おうという 'native honesty' に移って来る。こうして、この乞者の娘にたいする、ある程度の同情心が呼びさまされる」⁽¹⁹⁾ のであり、最後の行に至って、再び完全に Scots を排除することによって、戯画的な雰囲気のパランスをくずさないように計算されているのである。Crawford は、これと同じ性質の方法をもって、約三十種に及び微妙な二ヶ国語の使い分けを、細かく例証するのであるが、同時に、これらの語句を選択するに当って、バーンズがいかにか 'poetic device' を試みたか — English を Scots に置きかえ、Scots を English に置きかえ、さらに English を別の English に、Scots を別の Scots に置きかえ、その上、版を重ねるたびに詩句の改訂を行い、その用語が最後のな形を得るまでに、詩人がいかにか用語の上で、諸種の工夫をこらしたか — を、併せて、強く指摘している。McD. Emslie も云うように、「バーンズの poetic medium は、実際のところ、スコットランドの土俗語と、スコットランド風の英語と、文学的な英語との異った密度の間を、多様に変化し、二つの文化の質の相違が、彼に poetic device を可能ならしめている」⁽²⁰⁾ のであって、バーンズの試みた Scots と English の混用は、新しい medium を用いて丹念に作り上げられた造型の世界でこそあれ、天稟に恵まれ、質朴にして無学な一農夫が、心の赴くまま、感情の奔るにまかせて、郷土の卑俗な方言を用いて書きしるしたという類いのもものでは、決してなかったのである。

ところで、つぎには、バーンズをして Scots と English という二種類の言語を、かくも純粋な詩的用語にまで昇化することを可能ならしめたものは、いったい何か — その背後には、いかなる力が働いたか、いかなる条件を必要としたか — という問題の考察に移らなければならない。この場合、バーンズに賦与された詩人としての天分は云うまでもないこととして、少くとも、このことに関して、literary English と併用して、詩語としての役割りを十分に果し得る程度に、芸術的に成熟した Scots が、バーンズの時代に存在していたという事実と、Scottish English を詩的用語の新しい medium として容認し、その作品を、文学的に appreciate する用意のある受け入れ側 — 批評家と読者 — の存在していたという事実と、この二つの事実を見逃すわけにはいくまいと思われる。そして、Scottish English の芸術的成熟と、それを新しい poetic medium として歓迎しようとする心的態度の醸成との両者を、互いに関連し合い、源を一つにする現象として捉えるならば、それは、当然その前方に Scottish Revival の問題を、予見することになるだろう。云うまでもないことながら、バーンズの詩的天分は、問

題をその用語の面だけに限ってみても、**Scottish Revival**の運動というある時代の文学的土壌を背景としてのみ、開花し結実し得たのである。

バーンズと **Scottish Revival** との関連については、ほとんどすべてのバーンズ研究家が言及しているところであるが、この文学的気運の、日の目を見るために要した長い時間と、それに参与した無数の詩人たちとを考え合わせるならば、バーンズがそこから受けた巨大な恩恵については、いくら云っても、決して云いすぎるということはあるまい。この文学運動は、十七紀の中葉にその源を発し、いわゆる *Burns' Stanza* で書かれている “*The Epitaph of Hobbie Simson*” の作者 *Robert Sempill* (1595~1665)、その息子の *Francis Sempill* (1616~1682)、バーンズの “*Poor Mailie's Elegy*” の source をなしている “*The Last Dying Words of Bonnie Heck, a Famous Greyhound*” の作者 *William Hamilton* (1740~1754)、十七世紀最高のスコットランド詩人と云われる *Lady Grizel Baillie* (1665~1746)、さらに *Watson* による “*Choice Collection of Comic and Serious Scots Poem*” という画期的な業績を通して、バーンズの直接の師父とも云うべき *Allan Ramsay* (1686~1758) と *Robert Fergusson* (1750~1774) に至る一もっとも「*Ramsay* とバーンズの間だけでも、著しい数の弱少詩人が生れている」⁽²¹⁾ ののであるが—そのような歴史をたどっているのであって、バーンズは、云わば、この運動を集大成せる者とも云うべき地位を占めているのである。この運動は、遠く十五世紀の終りごろに、スコットランド語の古謡が絶滅し、約一世紀半の文学的空白の後に生れたものであったが、*Grierson* も云うごとく、「十八世紀になってスコットランドの詩が復活したとき、それは、個々の詩人により、また個々の作品により、その度合いはまちまちであつたけれども、とにかく **Anglo-Scottish poetry** であった。そして作者は、しばしばスコットランド風用語を、イングランド風用語に変え、スコットランド風の部分でさえも、時に応じて、便利のよいイングランド風の形式で用いたりした。その上、**Southern English** の絶えず大きくなって行く權威、**Southern English** を教養ある洗練された人々の文学にとって、最も適わしい上品な言葉と考える考え方が、これら詩人たちの頭の上のしかかっていた」⁽²²⁾ のであった。一方、そうは云っても、一面において、スコットランドの詩人たちが、自国の固有の伝統にたいして、強い執着を残していたということも、また事実であつて、**Scottish language** を完全に捨ててしまうというようなことは、やはり彼らの頭には思い及ばないことでもあった。この辺の事情は、「そのころのスコットランド人の愛国心は、いつの時代にもそうであるように、非常に旺盛であつたが、幸運にも、英蘇統一主義感情には、反抗的ではなかつた。スコットランド人は、みづから地方的偏狭の気分

のあることは認めていた。しかし彼らは国民的な誇りを棄てず、イングランド人よりも、本質的に優秀であるとの主張を、適度に、承認できる程度に主張していた。彼らは、知的社会的伝統を保持し、ますますこれを暖かく育てて行ったが、これはスコットランド人が、連合王国の一員であるという考えを持っていたことを示していた。スコットランドにおいては、歌、民謡、地方的伝統などはなおも生命を持っていて、単に文学的好奇心の対象だけではなかつた」⁽²³⁾ という *L. Stephen* の言葉が、概ね実相を捉えているように思われる。このような訳で、**Scotch** 固有の特性は強く保持しながらも、しかもなお、**literary English** を最高の規範と考えて、**Scots** を **English** の中に同化させようという強い指向は、この文学運動の基本的性格の一部を形作っていたわけである。十八世紀のスコットランド詩人たちは、多かれ少なかれ、上流社会の出身で、エジンバラを中心とした詩壇に属していたから、彼らは、いわゆる「伝統あるイギリスの文学」を懸命に習得し、**English** に同化させ得るような、独特な **literary Scots** を練り上げて行ったわけである。そして、この忍耐強い動きは、*Ramsay* と *Fergusson* の登場をもって、一つの **epoch** を形作ったもののように思われる。ここでは、確かに新しい **poetic diction** が生きており、思想と感情、詩型と素材等々すべての面と併せて、スコットランド的なものが、ある程度見事に、イングランド的なものと同化したのである。バーンズの詩を構成している用語の微妙さというものは、確かに、この長いスコットランド文学の歴史と、殊に、*Ramsay* 及び *Fergusson* の業績を念頭に置くことなしには、とうてい理解し難いものであるだろう。

バーンズを、無学な農夫などと考えることは、絶対に間違っている。第一、彼は「自分を農夫だと考えたことはなかつた」⁽²⁴⁾ のだし、彼が確実に目を通したと分っている書物の量だけでも、37年というその短い生涯を念頭に置くならば、およそ無学とは反対のものだったはずである。彼は、**Scottish Revival** の詩人たちと同じように、主として「伝統あるイギリスの文学」—*Shakespeare*, *Milton*, *Pope*, *Gray*, *Fielding*, *Smollett*, *Richardson*, 一を熟読し、そのかたわら、**Scottish Revival** の詩人たち、なかんずく *Ramsay* と *Fergusson* をお手本として詩を書いた。現在では、バーンズの作品の大部分に関して、その source が判明しており、それらは、時として、影響という範囲を逸脱して、模倣ともいふべき状態に達している。バーンズの特色をいかに発揮している、あの “*The Address to the Dail*” にしても、その用語の点だけを見るならば、冒頭の二行の motto は、*Milton* の “*Paradise Lost*” から、そのまま借りてきたものであるし、最初の stanza の出だしの二行は、*Pope* の “*Dunciad*” の中にある **couplet** を **parody** 化したものに過ぎないのである。一方、彼はスコットランドの詩

人たちの作品にも深く親しんでいたから、そちらからの恩恵も、またひとかたならぬものがあった。そしてその場合、Scottish Revival の詩風がほとんど完成の域に達していた Ramsay と Fergusson の作品を直接の目やすとしていたことは、やはり当然のことであって、この意味では、古くより伝わるスコットランド固有の詩歌を再生したという功績は、Scottish Revival の初期の詩人たちにこそ与えられるべきであり、バーンズは、それらを母胎とした Fergusson 一派の New School を全国的な地位にまで高めたというに過ぎないのである。バーンズの最高の傑作の一つに教えられるべき “The Holy Fair” の冒頭の一節

Upon a simmer Sunday morn,
When Nature's face is fair,
I walked forth to view the corn,
An' snuff the caller air.
The rising sun, owre Galston Muirs,
Wi' glorious light was glintin' ;
The hares were hirpling, down the furs,
The lav'rocks they were chantin
Fu' sweet that day.

を、Fergusson の “Leith Races” の書き出しの一節

In July month, ae bonny morn,
Whan Nature's rokelay green
Was spread o'er ilka rigg o'corn
To charm our roving een ;
Glouring about I saw a quean,
The fairest 'neath the lift ;
Her een ware o' the siller sheen,
Her skin like snawy drift,
Sae white that day.

に比較してみるならば、これは、果して影響という域に止まるものであるのだろうか。

Scottish Revival の長い歴史は、バーンズの出現をまわって、はじめて地方的なものから脱却して、普遍的な高みに達することを得たが、それは、この運動に参加した詩人たちの側からのみ、一方的に推進されたものである筈はなくて、当然のことながら、それを受け入れる一般の側からの強い stimulus に裏打ちされていなければならないはずであった。実際、詩人というものは、彼の時代における一般人の心的態度を、文学的に代弁するという役割りを、必然的に負わされているものであって、その意味では、バーンズ以前のスコットランド詩人たちが、地方的な限界を乗り越え得なかったということは、それを推進しようとする社会的な stimulus が、スコットランドという地方的な範囲に限定されていたということの意味しているわけであり、同時に、バーンズの普遍性は、それがより広汎な、いわば英国全土にわたる、ある

文学的機運に鋭くマッチしていたということを示すことにもなるわけである。事実、バーンズの出現は、一方において、スコットランドの伝統を強く保持しながらも、何とかしてそれをイングランド的なものに同化させようとする Scottish Revival の詩風が、概ね完成の域に達し、他方において、古典派文学の末期的症状がその脱出口を求め、Pre-Romantics の詩人たちが、新しい文学的気運を醸成しつつあるとき、ちょうどそのような時期に呼応していたのである。このことは、裏を返せば、Scottish Revival の運動が、バーンズの出現によって、Romantic Movement の一角に参加し、より広汎な視野と展開を開いたとき、はじめて、その次元を一つ高めることができたということにもなるのであろう。全く、L. Stephen の言う通り、「バーンズは、新しい時期を代表している。イングランドで抒情詩が減びてしまったように見えたとき、それが突然スコットランドにおいて生命を回復し、ある限度内において、到底これ以上出ることができないほどの、赫々たる成果に達したその真の理由は、社会と詩人とが、完全な調和の中にあつたということであり、これこそ、いかなる時代においても、真の偉大な文学の存在すべき条件に外ならない」⁽²⁵⁾ のであって、バーンズの詩歌から滲み出してくる、あのみずみずしい生命力というものは、確かに、英国のみならず、全欧州を覆って広がった浪漫主義運動の、あの若々しいエネルギーを母胎として生れて来たものに違いない。

スコットランドとイングランド合同の歴史をたどって行くならば、たぶん、その最初の重要なきっかけとして、1603年の二重王制に行き当ることになるだろう。この時以後「スコットランドの要求や習慣については何も知らないホワイト・ホールから、エジンバラの枢密院が命令を受け取る」⁽²⁶⁾ ことになり、公文書などは、一応 English を用いることになったけれども「両国の社会生活は、それぞれの水路を流れ続けて、相互の交流はほとんど見られなかった」⁽²⁷⁾ のである。つぎの大切なきっかけは、たぶん1650年から51年にかけての Cromwell 革命軍による、スコットランド鎮圧ではないだろうか。伝統と文化を相違はやはり根強く、スコットランド人のイングランド人に対する反感と猜疑心は、依然として旺盛であつたけれども、確かにこの遠征を契機として、れい属状態を必然と感ぜしめ、武力衝突による反抗をあきらめさせる結果をもたらした。Grierson の詩史によれば、「1603年に宮廷がロンドンに移ったため、スコットランドの宮廷詩は、自然に消滅し、それ以後、数人の詩人が宮廷風の詩を書いたけれども、それはすべて英語で書かれた。スコットランド風の詩に関する限り、この世紀の半ばに、Robert Sempill が出るまでは、何らの痕跡がない」⁽²⁸⁾ そうであるが、Scottish Revival の萌芽を示す R. Sempill の出現が、Cromwell のスコットランド鎮圧と、ほぼその時期を同じくしているという事実は、単なる偶然と

は、到底思えないものがあるのではないか。さて、革命政府による武力弾圧のつきに来るものは、当然、1707年の合同であるだろう。1688年の王制復古のとき、スコットランドはイングランドとの関係を継続させる機会を持ったが、Trevelyanによれば、「正しい選択」が為されて、結局両国は議会を一つにし、連合王国を形作ることになった。長い歴史の目から見れば、そこに選択の余地があったとは思われないけれども、とにかくこうして、「新国家 Great Britain の最初の主権者たるアン女王の下に、議会の合同が行われ、スコットランドは、その議会生活を失うかわりに、その報酬として、イングランドの市場と植民地において、十分な協力を得た。そしてこの特権は、スコットランドに永続する赤貧を駆逐する機会を開いた」⁽²⁹⁾ のであった。大ブリテン王国成立の意義について、今井登志喜氏は、「この時までのスコットランドの社会は、イングランドに比してなお二世紀も遅れた状態にあり、様々の封建的遺習が交配していた。人民の大部分は貧しい農民で、農法は中世的で排水が悪く、そのため肥沃な土地が沼のままで放置されていた一方、やせた丘が耕されていた。また人民の家は窓も煙突もないものであった。こんな風であったから、商工業は全くなく、今日ではロンドンに次ぐ大都市のグラスゴーも全然興っていないかった。人民は無智であったが、真面目な宗教信者でかつ活動的であったから、機会が与えられて、彼らの能力が十分に発揮されることは、イギリスにとっても望ましいことであった。ただ彼らには富と力が不足していたのである。しかるに合併後にはこれらの弱点が失せ、スコットランド人はこれまでイングランド人の有していた物質的利益に与り、彼らの仲間としてイギリスの国民的活動を豊富にすることとなった。十八世紀に彼らが如何に文化の各方面に貢献したかは、アダム・スミスやジェームズ、ワットをはじめ、スコットランドの生んだ各方面の偉人について考えれば十分である」⁽³⁰⁾ のごとく述べているが、両国の合同が、本当の意味で実を結んだのは、十八世紀も半ばを過ぎてからと考えるべきであり、その意味では、やはり Trevelyan の「30年あるいはそれ以上もの間、合同の利益はぐずついているように思われた。しかしジャコバイト問題及び1645～6のハイランド問題の清算後、スコットランドは幸福な時代への道を躍進した」⁽³¹⁾ という記述の方が、はるかに正確であるように見受けられる。確かに1750年ごろを境として「長い間惨めに暮していた貧困の牢獄から解放されて、スコットランドは突然輝かしい光の中に躍り込んだ」⁽³²⁾ のであり、ここにおいて、再び、この時期は Ramsay 及び Fergusson による Scottish Revival の画期的な業績の出現という文学史上の現象と、見事に照応しているのである。十八世紀後半におけるスコットランドの発展が、すべての歴史家たちを瞠目させるほど目ざましく、そしてその主たる原因が、スコットランドのイン

グランド化、ないし、両者の合同作用によるという図式は、確かに間違っていない。両国間の交通の改善（通行税令が1751年に出て道路を完備させた）、政治的諸制度の透滲（スコットランドの世襲的裁判権は1748年に廃止させられた）、農業上、商工業上の技術の移入、市場と植民地の解放、等々が、スコットランドの生活条件を飛躍的に改善し、そのおかげで、スコットランドの人口は、一世紀の間に65パーセントの増加を示し、国内消費税は、1707年の年収3万ポンドから、1797年の130万ポンドにまで増加した。そして当然のことながら、これらの変化は、スコットランドの知的精神的文化の面にも反映して「ヒューム、アダム・スミス、ロバートソン、デュガルド・スチュアートは全英国のみならず、大陸の哲学者のサロンにその勢力を伸ばし、一方スモレット、ボスウェル、及びバーンズは文学で、レイバーンは美術で母国を有名にした。かくして十八世紀後半は、スコットランドの黄金時代を現出した」⁽³³⁾ ののである。しかしながら、そうは云っても、この時期におけるスコットランドの発展を考えるに当たって、スコットランドに固有の、ある独自性の存在していたことを、無視してしまうわけにはいかない。衣食住の改善から、精神文化の繁栄に至るまで、その躍進の大部分を、主としてイングランドに負っていたことは間違いないにしても、地理的あるいは歴史的に存在しているスコットランドそのものの持つ現実を、完全に無に帰してしまうということは、不可能であるに違いない。日常生活全般にわたる急速な変化にもかかわらず、スコットランド人たちが、依然として、ミルク入り粥を主食とし、毛織りのボンネットを被り、新しい石造りの家の中で牛と同居し、古い宗教制度を固執し、私生活ではスコットランド語を話し…というような現象は当然のこととして、スコットランドの独自性とは、究極において、そこが農業国であったということに外ならないのではないか。つまり、十八世紀後半における産業上の変革が、イングランドでは工業を中心として行われたのにたいし、スコットランドでは、それが農業を中心として行われたということになるのではないだろうか。Trevelyan は、「十八世紀初頭に、スコットランドで見られた惨状からの解放は、主に農業の方法における革命を通して訪れた。それはイングランドの農村における同時代の運動に似ていたが、この世紀が始った時スコットランドの農業がイングランドのそれよりも遙かに劣っていたため、一層大きな変化を残した。改良は二、三のスコットランド人地主の活動によって始められた。その人々は彼らの小作人に南ブリテンの新しい考えを教えるため、イングランドの農民と農業経営者を連れてきた。そして改良はナポレオン戦争の時代に輝かしくも絶頂に達した。この時には、スコットランドでこの頃までに発達を遂げていた方法を教えるため、ロシア人地方から管理人と農民が、イングランドへ連れて行かれた

のである。1760年から1820年までの間に、イングランドの農業は前にも後にもない程非常に早さで進歩した。しかもなお、まさにその時代にスコットランドの農業はそれに追付き、それを追越した」⁽³⁴⁾と書いているし、A. Toynbee は、「英国産業革命史」の中で、十八世紀末のスコットランドに、イングランドではその頃まだ知られていない賃金形態の農業労働者が、すでに存在していたという事実を指摘しているのである。

バーンズの伝記で、バーンズの貧困を強調しないものは、まず皆無といって差し支えないし、貧乏、困窮、悲惨は、バーンズの作品に繰り返し現われるテーマで、「隠者の暗い陰うつと、ガレー船の止むことなき労働」⁽³⁵⁾というバーンズ自身の言葉、「数年間は、肉屋の肉を食ったことがなかった」⁽³⁶⁾という弟ロバートの言葉、これらを、よもや疑うわけにはいかないと思う。しかしながら、この場合、その貧困というものが、貧困の一般的通念ないしは、その時代の平均との比較においての貧困でしかなかったということも、また忘れるべきでないと思う。「バーンズ時代の頑健なスコットランド人は、彼らの父祖 — 食糧、衣類、煙房の缺乏から、殆んどの場合憔悴し、だらしなく、生気のないのがありありと分った — とは異った民族のごとく思われた」⁽³⁷⁾ ということは、やはり疑いのない事実であって、半世紀以前のスコットランド人一般の standard から見れば、バーンズは、極めて裕富であったとさえ言い得るのである。バーンズを民族詩人という名前でもって呼ぶ人が多いけれども、バーンズを、その時代のスコットランドそのものが孕んでいたエネルギーの文学的表明、国民文学の象徴という角度から捉えようとするならば、詩人個人の貧富の問題よりは、十八世紀後半に見られたスコットランド全体の富の増大、ないしは、それによってもたらされた諸々の社会的変動こそ、その限りににおいては、一層本質的な契機であるということを忘れてはなるまい。そして、このような国力の増進と、それに伴う社会的変動とが、農業を主体とした自国の独自性を強く保持しながらも、しかもイングランドからの恵与を、余ますところなく受け入れることによって可能になったということについては、前述した通りであるが、このことこそ、十八世紀末のスコットランドに漲っていた社会全般にわたるエネルギーの源泉であったと同時に、その社会の一般人の心的態度の質と方向を決定する、基本的なモメントでもあったのである。急速にイングランド化して行かなければならないという基本的な命題が、イングランド崇拜の気運を助長する一方では、スコットランド独自の現実に立脚しなければならないという潜在的な命題が、イングランドにたいする反感、自負、猜疑心などと結びついて、伝統や民族意識の高揚を煽ったわけであり、この両者の複雑なからみ合いの中に、この時代におけるスコットランドの文化全般にわたる一般的風潮が形作られたのである。つま

り、「スコットランド人の会話は、イングランド人にとって、日増しに耳ざわりでなくなってきたようだ。彼らの話し方の特徴は、急激に消えて行きつつある。彼らの方言は、半世紀の間に、彼ら自身にとっても、田舎くさいものになってしまったものらしい。偉い人も、学問のある人も、野心家も、無能な人も、みな英語風の云いかわし、発音の仕方を磨き上げている。立派な人たちの集まりでは、時おり老夫人の口から発せられる以外には、スコットランド語を耳にすることはなくなった」⁽³⁸⁾ という Johnson の観察が、この実相の一面を確かに捉えている一方では、「スコットランドの息子をイングランドの公学校に送るという考えは、節約と愛国心のいずれからとも考えられないものとされていた。スコットランド訛り — 最も身分の高い人々も それを恥じ「な」かった — や、伝記や農村の民謡は、すべての人に共通の世襲財産であった」⁽³⁹⁾ という Trevelyan の発言も、また、一面の真実を語っていることになるわけである。Scottish Revival を推進した詩人たちの脳裏から、ほとんど固定観念のように離れることのなかった強い指向 — イングランドの文学を最高の規準と見なしながらも、Scots の持つ特異性を、あくまで生かそうとする試み — の原動力は、このような社会全体に深く滲透していた一般的風潮を念頭に置いて考察するとき、極めて明確な一視点を得ることになるように思われるのである。

英蘇合同に端を発した、約一世紀半にわたるスコットランド社会変革の歴史は、この時期におけるスコットランド人の文化面に見られる諸性格を、力の面でも、方向の面でも、その根底において強く規制したから、それが、文学の上に示顕して、Scottish Revival という形を取った。従って、バーンズの諸作品を構成している詩的用語のあの奥行き、深さ、芸術的完成度、力強い生命力というものが、その時代のスコットランド社会そのものの持つ高揚力を母胎とし、彼の用語の上に見られる二ヶ国語混用という特色が、その社会の基本的性格を反映したものであるという図式は、一応正しいものとしても、それは、バーンズが、スコットランド地方に限って、その一般人の心的態度を表現したということ以外には、何らの説明もしてくれはしない。バーンズの詩を、最初に支持したものが Edinburgh 詩壇であったにもせよ、ときには、それはイギリス浪漫派の詩人たちによって、さらには、浪漫主義を讃美する批評家たちによって、強力に支持されたのである。バーンズの詩歌の社会的基因は、単にスコットランドという地方的限界を乗り越えて、存在していなければならないはずであった。そしてこのことに関しては、たぶん、十八世紀後半におけるスコットランド社会の変動が、いかに激しいものであったにしても、ほぼ同種類の社会的変動は、同じ時期のイングランドにも見出し得たという事実には、注目する必要がある。

あるだろう。スコットランドが農業方面を中心とし、イングランドが工業方面を中心としたという、大まかな相違を別とすれば、生産諸力の急激な上昇と、それに伴う各種の社会的変動とは、十八世紀後半のイギリス全土、あるいは全ヨーロッパにまたがって、見出される傾向でもあったのである。

生産手段の発達、人口の増大、新しい資源の開発という、社会の根柢を支える三つの要素が、急速な勢いをもって増大した結果は、生産にたずさわる場合の人間同志の関係を一変させて、その社会を担うブルジョア階級の質的転換、階級組織の急激な革新をもたらした。従来、その社会の知的精神的活動を代表していた階級の心的態度は、もはやその生命力を失って、つぎに社会を担うべき、新しい階級に漲る若々しいエネルギーが、つぎの時代の心的態度を決定するに至る。Scottish Revivalの文学を推進した詩人たちが、主としてEdinburgh詩壇を形作るスコットランド貴族の出身であったのにならして、バーンズが、貧農の出身であったということは、この場合、まことに象徴的である。因みに、Ramsayは貧民階級の出身であり、Fergussonは下級牧師であった。つまり、スコットランド地方の急速な発展という歴史的契機が、イギリス全土にわたる社会的変動、単的に云って、産業革命の一環を形成するに至ったのに呼応して、Scottish Revivalの文学は、イギリス浪漫主義文学の一角に合流し、それは、一躍して、新しい輝きを帯びるに至ったのである。そして、浪漫主義運動の視点からするバーンズ文学の考察を、以下に続く章の中で行いたいのである。

註(1) 'It is in the poems and songs conceived in the spirit of reckless "Joie de vivre" and overflowing humour that Burns has no rival.' H. Grierson : "A Critical History of Eng. Poetry" Chatto & Windus, London 1950

(2) 'Burns is everyman. The feelings which he celebrates are feelings familiar to all, even to those who, in mere self-protection, deny that they feel them. There is no escape from him. He blurts out what everyone is thinking, even though most of his hearers are trying not to think it.' W. Raleigh : "In his Some Authors" Oxford 1923

(3) 'How joyously and confidently Burns bestrides the narrow world, how skilfully he raises the gossip, the bickerings, the old wives' tales of a few Ayrshire parishes to something of universal significance : The poems, even if we regard them only as pictures of "Scotch drink, Scotch religion, and Scotch manners" in the eighteenth century, live by virtue of the imaginative insight and poetic craft that they

display.' ed. by J. McVie : "Robert Burns" Oliver & Boyd, Edinburgh 1951

(4) 'None certainly ever outshone Burns in the charms - the sorcery I would almost call it.' Mrs. Dunlop: quoted in "A Critical History of Eng. Poetry"

(5) 'Beyond the passion, the homeliness, the humour of Burns, there lies another reason for his compelling appeal, in the potency of his personality ; his vigorous vitality, his contempt of timid conventions, his delight in the strong and elemental, and his undertone of melancholy.' ed. by Peter Westland : "The Romantic Revival" The English Universities Press, London 1950

(6) 'Love and intimate knowledge of Nature, a quaint and racy dialect, a passionate concreteness of imagery, a rich allusiveness - these were focused with especial brilliance in his genius. He summed up in himself all that was finest in Scots Song!' ibid.

(7) 'Brought up on the Bible, Burns was able to clothe its teachings in the familiar language and allegory of his time, and this must, in no small measure, account for his enduring popularity.' P. Esslemont : "Brithers A" George Ronald, London 1959

(8) 'Burns' description of himself indicates very clearly certain aspects of his poetry : "a constitutional melancholy and hypochondriasm made me flee solitude." A social being himself, Burns' poetry is a social poetry - a poetry written to amuse and interest an audience.' H. Grierson : "A Critical History of Eng. Poetry"

(9) 中村為治 : 「英米文学評伝叢書32巻バーンズ」研究社昭和9年。

(10) (11) L. Stephen : 「18世紀における英文学と社会」(岡本圭次郎訳) 研究社昭和31年。

(12) 'It was not in the English which he studies and practised so assiduously that Burns was to write anything of enduring merit, but in the homely Scots which he learned by daily use in his family and among his associates.' H. Grierson : "A Critical History of Eng. Poetry"

(13) 'When he strays away from his own class, we merely see in him the rough, uncultured man assuming an unnatural and uncongenial pose. For he was not the poet of civilization and culture.' ed by P. Westland "The Romantic Revival"

(14) 伊津野直「ロバート・バーンズ」啓文社昭和34年。

(15) 'A philologist would point out that Burns's lite-

rary language was a language apparently never spoken by anyone, but fabricated by Burns for his particular purposes. He would point out how Burns experimented with the Scottish elements in this language, sometimes adding a little of the vernacular to make a poem more acceptable in its second publication, and sometimes just reversing this process' F. B. Snyder : "Robert Burns" Toronto, 1936

(16) 'People speak sometimes as if Burns were able to write interesting verse only in his vernacular, as if he were a failure in English. But when is his language vernacular, and when English?' W. P. Ker : "On Modern Literature" Oxford 1955

(17) 'It (Burns' work) contains an infusion of "hamely westlin" Ayrshire dialect, possibly even a touch of his father's Mearns dialect ; but in the main it is the Scots of the Edinburgh poets with a varying intermixture of English poetic words.' McD. Emslie : "Burns and the Alien Diction" Essays in Criticism Oct. 1960

(18) 'The first two lines are almost entirely in eighteenth-century literary-English, but the contrast with the immediately preceeding part of the poem (the caird's song in Scots) make the use of inset English poetic diction (prevail'd, fair) ironic.' T. Crawford : "Burns: A Study of the Poems and Songs"

(19) 'The third line contains a shift in tone ; it's return to full Scots marks a move away from the earlier irony and towards a 'native honesty' that sees the situation as it really is and deals in genuine emotions; it thus invites a certain degree of sympathy for the beggar girl.' *ibid.*

(20) 'Burns' poetic medium, in fact, varies between different densities of vernacular Scots, English-with-a-Scots-accent, and literary English. The quality of two cultures gave him a poetic device,' McD. Emslie: Essays in Criticism Oct. 1960

(21) 'Between Ramsay and Burns it (Scottish Revival) yielded a remarkable crop of minor poets' H. Grierson

(22) 'When Scottish poetry reawoke in the eighteenth century, it is in varying degree in individual poets, varying degrees in individual poems by the same

author, an Anglo-Scottish poetry, allowing a poet ever and again to pass from a Scottish to an English diction, and even in the Scottish parts permitting an occasional convenient use of an English rather than a Scotsish form. And further, the ever-growing prestige of Southern English as the politer tongue, the tongue proper for a literature addressed to cultured and polite circles, hangs over the heads of all these poets.' *ibid.*

(23) L. Stephen : 「18 世紀における英文学と社会」

(24) 'He was not a farm-servant, and he never really thought of himself as one.' H. Brown : "There was a Lad" Hamish Hamilton, London 1949

(25) L. Stephen : 「18 世紀における英文学と社会」

(26) (27) Trevelyan : 「英国社会史」(林健太郎訳) 山川出版社昭和25年

(28) 'With the removal of the court to London in 1603 Scottish courtly poetry died a natural death. Several Scotsmen wrote courtly poetry after 1603, but they wrote in English ; of written Scots verse there is no trace until, about the middle of the century, we come on Robert Sempill.' H. Grierson

(29) G. M. Trevelyan

(30) 今井登志喜「英国社会史」東京大学出版会昭和34年

(31) (32) (33) (34) G. M. Trevelyan

(35) 'The cheerless gloom of a hermit with the unceasing toil of Galley-slave.' C. Carswell : "The Life of R. Burns" Chatto & Windus, London 1951

(36) 'For several years butcher's meat was a stranger in my house.' *ibid.*

(37) G. M. Trevelyan

(38) 'The conversation of the Scots grows every day less unpleasing to the English ; their peculiarities wear fast away ; their dialect is likely to become in half a century provincial and rustick, even to themselves. The great, the learned, the ambitious, and the vain, all cultivate the English phrase, and the English pronunciation, and in splendid companies Scotch is not much heard, except now and then from an old Lady.' Johnson : "A Journey to the Western Islands" Oxford Standard Authors 1924

(39) G. M. Trevelyan